青銅の魔力

編集者・ライター　タカザワケンジ

ふだん、取材して文章を書いたり、本を企画・編集したりしている。本を読むことは苦痛ではなく、むしろ生活の中の欠かせない習慣だ。本を持たずに電車に乗ると、読んでいない吊り広告を目で探してしまうくらいだから、「活字中毒患者」なのだろう。

物心ついた時から絵本、児童文学のたぐいは好きで読んでいたが、「病気」を決定的にしたのがポプラ社の江戸川乱歩シリーズだった。名探偵明智小五郎と少年探偵団が怪人二十面相と対決する物語に夢中になった―と言いたいところだが、どうやら子供心にも、お話の「ワンパターン」は見抜けたようで、読み続けるうちにストーリーやキャラクターには次第に飽きが来た。それでも、図書館にあった全46巻をすべて読み通したのはなぜだったのか。今思えば、乱歩が思いついた奇想天外な道具立てに目を瞠ったことと、ぼくの少年時代にはとっくになくなっていた風物や言葉遣いが何とも魅力的だったからだ。

『青銅の魔人』は乱歩が少年のために書いた物語としては比較的初期に当たる。昭和11年に『怪人二十面相』を上梓し、少年少女に熱狂的に受け入れられた乱歩は、続いて『少年探偵団』『妖怪博士』を矢継ぎ早に発表し、好評を博す。しかし、太平洋戦争へ向かう時局柄、戦争と関わりのないミステリーは当局から紙の無駄遣いと見られたらしく、『大金塊』を書いたのちは、少年探偵団シリーズも沙汰止みとなる。しかし、戦後、昭和22年から少年探偵団シリーズの旧作が復刊されると、娯楽に飢えた少年少女が争って手に取り、その勢いをかって、再び明智小五郎と、少年探偵団の団長小林少年との名コンビが復活した。その戦後第一作が『青銅の魔人』である。

時は深夜、所は東京銀座のど真ん中である。冬の深夜に外套も着ずに、青い背広姿の男がよろよろと歩いている。ポケットから束になった懐中時計をはみ出させ、ギリギリと歯車の音をさせながら……。その男こそが青銅の魔人である。彼はなぜか時計に異様な執着を見せ、銀座の名店のショウウィンドウから高級懐中時計を大量に盗んだかと思えば、時計塔の大時計をそっくりいただく始末。そのうえ、世にも珍しい「夜光の懐中時計」を狙って犯罪を予告した青銅の魔人は、事件の解決を依頼された明智小五郎と対決することになる。

ところで、青銅の魔人を乱歩はどのように描写しているのだろう。「人間の顔ではない。青黒い金属のお面です。鉄のように黒くはない。銅像とそっくりの色です。青銅色というのでしょうか。」「こいつはお面を被っているのではありません。うしろのほうまでずっとつづいているのです。耳も首も、それから頭の毛まで、みな同じ青銅色に光っているのです。髪の毛はひどくちぢれて、大仏の頭のように、無数の玉になっています。」

今回、20数年ぶりに『青銅の魔人』を読み返して、イメージが

『青銅の魔人』
江戸川乱歩全集（講談社・昭和54年初版・市川英夫装幀・全25巻）に収録されている『青銅の魔人』。挿絵は花輪和一氏。イメージされているのは西洋の騎士だが、乱歩の本文とはちょっと違う。

『大仏』
鎌倉の大仏。最初は木造で1243年完成。1252年に青銅製にすべく着工した。総高（台座共）13.35m　青銅仏身11.312m　重量121t。国宝。

ずいぶん違うことに驚いた。記憶の中では、魔人は西洋の「騎士」の鎧を思わせる洋風のいでたちで、ロボットをイメージさせた。しかし乱歩は「大仏」と書いている。

乱歩が大仏を引き合いに出してきたのは、子供たちにも馴染みやすい、大きくて強そうなイメージを拝借したかったからではないか。また、大仏のみならず、青銅は威風堂々たる銅像を連想させる。雨露にさらされて、青く変色した青銅の偉容は、時間を溶かし込んだような重みを感じさせる。大人にとっては単なる巨大な仏像であり、銅像かもしれないが、子供にはそれが動き出すのではないかという恐怖の源になる。

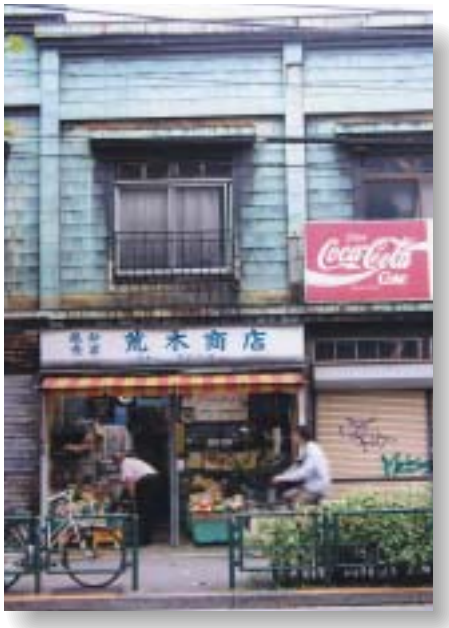
鎌倉の大仏はまさに青銅といった青さだが、これは経年変化と、雨露にさらされて錆びたからだ。鋳造時は銅の黄が強いが、錆びると青くなる。東京の下町を歩いていると、今でも通りに面した正面に青銅のプレートを貼り付けた商店を見かけることがある。関東大震災後に雨後の竹の子のように出現した「看板建築」である。

看板建築とは、東大教授の建築史家、藤森照信氏が名付けた建築の様式で、商店の真っ平らな正面に青銅の板やモルタル、タイル、スレートなどを貼り付けた建築物のことだ。藤森氏の著書『看板建築』（三省堂）によれば、青銅が使われたのは防火対策と、銅市場が意外と安値だったからしい。しかも、家の造りは木造でも、銅板やスレートを張れば、アラ不思議、どこか「洋風」の香りがしてくる。一方で、江戸の伝統を引き継いだ紋様もデザインに採用されていたともいうから、看板建築は過去（江戸）とモダン（西洋）、現在（木造建築）のあわいに成立した日本ならではの建築様式だということになるだろう。

『青銅の魔人』を読み返して、なおも謎が解けないのは、なぜ魔人が時計に執着したかだ。時計が子供たちにとって「宝物」に見えるのは間違いない。しかし、宝石や文化財とはひと味違うイメージがあることに注目してみたい。時計はメカニック、モダンな技術を象徴している。歯車の音を鳴らして動く青銅の魔人は、先端技術の「ロボット」のイメージをもまとっている。青銅の身体をゆらゆらと揺らしながら、精密に時を刻む時計を求めて歩く……そこには、懐かしさと新しさの二つが矛盾することなく同居している。古くて、新しい。乱歩の小説世界と共通する奇妙な時間感覚が、青銅から立ち上ってくる。

『銅像』
高田馬場駅前の「平和の女神」像。現代の流行はオブジェで、こうした具象的な銅像はあまり見かけなくなったような気がする。

『看板建築』
藤森照信・文、増田彰久・写真『看板建築』（三省堂）。看板建築の名付け親でもある藤森照信氏による決定版的な一冊。図版多数でわかりやすい。



『果実店』
「看板建築」の例。早稲田通りに面した商店。青銅版がタイルのように張られている。経年変化によっていい味わいが出ているが、この種の建築物は年々失われつつある。

タカザワ ケンジ氏　略歴　編集者・ライター

1968年群馬県生まれ。早稲田大学第一文学部演劇科卒。就職情報会社を経て、98年からフリーに。雑誌、書籍、ウェブサイトの企画、編集、執筆を行なっている。「季刊クラシックカメラ」（双葉社）、「チーズプラザ」（メディアセレクト）などの写真・カメラ雑誌では写真家インタビュー、ハウツー記事を手がける。オンライン書店bk1（http://www.bk1.co.jp/）では作家インタビューのほか、書評を執筆している。

著書に心理カウンセラーに取材した『カウンセラーになろう!』（オーエス出版）。写真・カメラ関連の編書に『ライカな眼』（高梨豊著・毎日コミュニケーションズ）、『使うローライ』（良心堂編・双葉社）ほかがある。HP:http://alkali.gooside.com/